
アベンジャー

ふんわり卵焼き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アベンジャー

【Nコード】

N1641N

【作者名】

ふんわり卵焼き

【あらすじ】

今から約200余年後の地球（主に日本）が舞台。生体兵器として人類の為に戦うことを余儀なくされた少年と少女の物語。

プロローグ？（前書き）

なんとなく思いついてしまった物語を中途半端に文章にしてしまいました。ごめんなさい。続きは完全に未定です。幻想士英雄譚の執筆中のリフレッシュついでにちょこちょこ書き進める程度なので。

ブローグ？

2010年7月××日、大気圏外から大質量の隕石が中国大陸に落下し、中華人民共和国という一つの大国が世界地図から消えた。

中国の消滅は世界経済に甚大な損害を及ぼし、各先進国を未曾有の経済恐慌に陥らせた。

だが、それは人類にとってほんの些細な問題に過ぎなかったことを、隕石落下一ヶ月後になって、世界は最悪の形で理解させられることになる。

突如として、隕石落下地点を中心とした周辺各国に、これまで地球には存在しなかった生命体が襲来したのだ。

僅か一ヶ月の間に地球の生命体は何億年もかけて構築していった進化過程を踏襲し、貪欲ともいえる捕食本能を伴って行動範囲を広げていった結果である。

世界各国政府に初めての隕石落下地点での未確認生命体発見の報告が知らされてから2ヶ月後——日本を除くアジアほぼ全域から人類が消えた。

世界はこの未知の生命体を unidentified monster (UM) と呼称し、人々は文化も宗教も関係ない共同戦線を余儀なくされ、人類の脅威を殲滅すべく急速に動き出す。

そんな世界情勢の中で、とある科学者がUMの死骸を分析した結果、その体液が従来の化石燃料に替わる新たなエネルギー資源となる可能性を示唆し、世界各国の興味を引く。

そして、優秀な科学者が昼夜問わず血眼になって研究に励んだ結果、とうとうUMから採取した体液を新エネルギーとして転用する目途が立てられた。

朗報を聞き、喜びに湧き立つ世界の要人達が開口一番にのたまったのが……次世代兵器構想——新エネルギーを流用した人間をベースとする対UM用生体兵器の開発だった。

適合者の身体にDNAレベルで新エネルギーである *Active - Energy (ACE)* を融合させ、絶大な身体能力を獲得させたうえで兵士として訓練するというプログラムである。

各国政府は正規、非正規を問わずありとあらゆる方法を駆使して人材を集めた。その数は世界人口の約13%にも達し、各政府機関の研究施設にて研究開発された。

政府公認のもと、残虐非道、熾烈極める人体実験が繰り返され、その中で無事に生き残ってみせた300余人が第一世代型の生体兵器 *アベンジャー* として実戦投入されることになる。

第一世代型の特性としては、過酷過ぎる適正条件に裏打ちされた身体能力の飛躍的な向上が主たるものである。

例としては体力と新陳代謝の劇的な向上。音速の弾丸すら見極め、避ける動体視力と反射神経。素手で鉄骨を折り曲げ、優に50mを超える跳躍力などの筋力向上があげられる。

しかし、第一世代型最大の特徴といえ、新陳代謝向上に関する副次効果として発見された”不老”といえるだろう。

詳しい原因は不明だが、老化の原因とされる細胞死が新エネルギーの同化によって完全に抑制される為、第一世代型の適合者は身体的、外見的な衰えが一切ない。

ただし、いくら新陳代謝が向上したとはいえ、あくまでも不死で

はなく、頭を吹き飛ばされるなどの致命傷を負えば当然死に至る。それに加えて生殖能力も失われてしまうので、子孫が残せない。

そんな怪物染みた能力を兼ね備えてしまった彼らを、人々は一方で”英雄”と称し、一方で”化け物”、とある宗教に属する者たちは生物としてのあるべき姿を逸脱してしまった彼らを挙って”悪魔”と呼んだ。

軍隊が編成した”殲滅戦”正規部隊の先駆けとして最前線に投入された第一世代型のアベンジャー達は、その尽くが戦地にて儚いとは”いえなくなってしまう”命を散らせた。

多くのアベンジャーが散って逝ったこの戦争は、後に 起禍戦争と命名された。

それから200年後――

第一世代型でありながら起禍戦争を戦い抜き、見事生き残ってみせた11名のアベンジャーが アウター・イレヴン と呼称され、生きた伝説として捉えられるようになっておよそ150年。

テクノロジーの進歩に伴い、従来の石油に替わる新エネルギーの研究開発が一旦の終局を迎え、現存するアベンジャーの主力が第三世代から第四世代に取って代わった時代。

――物語は、アウター・イレヴンの一人であった人物の葬式から幕を開ける。

しとしと冷たい雨が降りしきるなか、黙々と埋葬の準備が進められていき、そして棺桶が静かに地中へと埋められた。

「……これでアウター・イレヴンも残すところあと5人になってしまったのね」
「そうだね」

かつての”戦友”が大地へと還っていく様を見つめながら、銀髪の女が静かに呟いた。

それに対し、白髪の男はどこか声音に寂しそうな響きを乗せつつ、表面上はそっけなく答える。

イギリスの片田舎で行われた小さな葬式は、とてもではないが皆が言う”英雄”を葬るに相応しいとはいえない。

だが、「最後は親しい者達だけで静かに見送ってほしい」——それが生前の彼の願いであつた為、残された者達はそれに従つた。

だが、沈痛な空気漂うこの場に彼の家族や親戚は一人も参列していない。

彼はアベンジャーとして抜擢される前から既に結婚し、2児の子供を儲けていたが、それから200年も経つてしまえば、その関係がどうなるかくらいは想像がつくだろう。

第一世代型のみが会得した不老の特性を羨む人間は確かに多い。しかし、自分が年老いていく横で、いつまでも外見の差異が見られない隣人というのは、人に生理的な嫌悪と恐怖を抱かせてしまうのもまた事実なのだ。

仕方がないとはいえ、悲しいことだと銀髪の女——雪風は思った。なんともいえない感情に駆られ、雪風は隣に立つ白髪の男——聡一の手をそつと握る。

聡一は何を言うでもなく、ただ黙って手を握り返した。

当時、高校卒業と同時にアベンジャーの適合者として国から抜擢され、それ以来外見は18歳のまま200余年の時間ときを生きてきた2人は、今現在、対UM特殊戦略実動部隊 ブラッド・ヴェイン 日本支部の重鎮として席を置いていた。

第一線を退いて日本支部の支部長として活躍する雪風と、第一世代型アベンジャーとして世界でただ一人現役を貫いている、別名人類の最終兵器 こと世界最強のアベンジャーである聡一。

2人は、『これで家族に会える……』と微笑を浮かべながら遠くへ旅立った亡き戦友を想い、そつと黙祷を捧げた。

学校——それは知識を得る場所であり、社会のルールを学ぶ場所であり、人との接し方を学ぶ場所である。

学生——長い人生の中で、青春という名のかけがえのない一瞬を謳歌できる唯一の存在。

……ただ、人がそれを悟れるようになるのは、もう二度と引き返せない場所に立ってしまつてからである。

『お呼び出しいたします。高等部2年B組、琳杖天音君。りんじょうあまね 同じく2年B組、桜井神流さん。さくらいかん お迎えの方が来ています、事務室までお越しください。繰り返します——』

耳障りな放送に眉を顰め、神流は大きく伸びをする。その顔には「またか……」といった心情がありありと浮かんでおり、周囲に人間には彼女の不機嫌な様子が手に取るように理解できた。

神流は放送があつたにも関わらず隣の席で気持ち良さそうに寝ている天音を横目で眺め、無言で机の中にあつた教科書を鞆に詰める
と、彼に向けて振り下ろした。

「さつさと起きる！」

「ぶぎやーッ!？」

重い打撃音と共に天音が跳ね起きる。それを見た神流は満足そうな顔を見ると、天音の襟首を掴んで教室の外へと引き摺った。

そんな漫才を黙ってみていた級友達は、苦笑しながら控え目に手を振って彼らを見送る。この時間の授業を担当していたBクラス担任の先生も「明日もちゃんと学校来るんだぞ？」と若干の心配を舌に乗せつつ、教室を出ていく天音と神流に声を掛けた。

「いつてきまーす」

それらに軽く会釈して答えた神流は少し悪かった機嫌を少しばかり上方修正させつつ、天音を連れて教室をあとにした。天音も襟首を鷲掴まれてズルズルと引き摺られながら、手を振りつつ教室から消えていった。

2人を見送った2年B組の教師と生徒達は、再びいつもの授業へと身を委ねる――さも、これが日常の風景だといわんばかりに。

まだ授業時間中であり、その為人氣が全くない廊下を黙々と歩いていく天音と神流。まずは下駄箱がある玄関に向かい、靴を履き替えてから事務室に向かわなければならぬ。

自分の足で歩いていく一步一步が、自身を死地へと導いていることを知っている天音は、重い溜め息を吐いた。

それを横目で見ていた神流が半目で天音を睨む。

「またそんな溜め息なんか吐いて……もう少しアベンジャーとしての自覚を持ったらどうなの？」

そう吐き捨てた神流は、苛立ちを隠そうともしない。

”いつものこと”ながら、天音は弱々しい表情で呟いた。

「そんなこと言っただけで怖いものは怖いんだから仕方ないだろ？そもそも適正があるって理由だけで無理矢理アベンジャーに選定されて、『人類の為に戦え』とか……ふざけんなよ。こちとらまだ学生だっつもの。”学徒兵”とか時代遅れなんてレベルじゃないだろが」「それこそ”仕方ない”じゃない。こんな”時代”の中でそういう”才能”を持って生まれちゃったんだから。割り切るしかないですよ」

「あーあ、やっぱ”第四世代”きつての優等生様は言うことが違うねえ。さすがでございますホント」

「……天音だつてその気になれば——」

『まだ周囲の教室は授業中でしょうか？迷惑になるからその辺にしておきなさい』

剣呑な雰囲気醸し出し始めた2人を諷めるように、一人の女性の声が静かに響いた。

「怜さん？」

「……隊長」

天音と神流が所属する部隊の隊長である柊^{ついで}怜。その戦闘力は第三世代、第四世代型のアベンジャー達の中でも頭一つ抜きん出ている実力者だ。

生来の茶髪を腰まで伸ばしたロングストレートのヘアーに、同じく薄茶色の瞳孔が特徴的な抜群のプロポーションを誇る美女であり、暗緑色を基調としたノースリーブのトップスと短パンにミリタリーブーツといった軽装をしている。戦う者が身に纏う格好としては疑問を抱かざるをえないが、それでもブラッド・ヴェインで制式採用されている歴とした戦闘衣であつたりするのだから、何も言えない。アベンジャー専用戦闘衣として支給される物のなかでも、隊長は各々好みのデザインに調整されたトップスとボトムスを着用することを許されており、怜の戦闘衣もその例に漏れない。

そんなことはさておき、まだ靴を収納している下駄箱までは距離があるのにも関わらず、何故隊長が校舎にいるのか、2人はそこが疑問だった。

「隊長、なんでわざわざ校舎に？」

「うん？ちよつと懐かしくなっちゃってね。気の赴くままに足を運んでみただけよ」

神流はぺろつと舌を出しておどけてみせる怜に若干呆れを含んだ視線を送りつつ、我らが隊長のフリーダムさに苦笑した。

そのまま「久々の学校はどうでしたか？」などの他愛もない会話に移行する女性2人。戦場に赴く前だというのに、その態度には余裕しかない。

それを意識して、鬱陶しいと思うと同時に羨ましくも思う天音はストレスからキリキリと痛み始めた胃の部分を軽く押さえつつ、気付かれないように溜息を吐いた。

（一人で抱え込んだじゃって……バカ天音。何の為にチーム組んでると思ってるんだか）

（ここはしっかりと年長者である私がフォローしてあげないと）

実はすっかり気付いている神流と怜だったのだが、それを指摘すると天音のテンションがさらにガタ落ちしそうなので、今は敢えて気付かないフリをした。

技術の発達により、従来から広く使われてきた回転翼機はほぼその姿を消し、新基軸の航空機が幅広く利用されている時代。

ブラッド・ヴェイン日本支部が保有する特殊な軍用輸送機の中に、天音と神流はいた。

エンジン音はほぼ皆無、燃料はガソリンに変わってACEを液化加工した新燃料を利用し、回転翼機か一部の戦闘機しか成し得なかったホバリングや垂直離着陸を可能としている最新のVTOL機である。

機体に内蔵されている高性能AIによる全自動操縦により完全な無人運用が可能だが、通常は人間の操縦士、副操縦士が機体の運用を行っている。

天音達が今乗っている短距離輸送タイプは乗員数は操縦士等を含め、最大8名までであるが、長距離輸送のタイプはトイレの他に洗面台、簡易台所、仮眠ベッド、いくつかの遊具などが完備されているという話だ。

支部長専用機など、その内装はどこぞの超高級ホテルにも見劣りしないものと噂されているが、真実は定かではない。

まあそんな事実など、天音にとっては心底どうでもよかつたりするのだが。

（ああ……緊張からまた腹痛くなってきた……）

げんなりとしながら自らのお腹を擦る天音は、念の為に常備している下痢止めの錠剤を飲んでおいた。

それを横から見ていた神流は蒼い顔をしている天音の隣に腰掛けると、ウェストポーチから真空パックに包まれた梅干しを一粒取り出した。

「はい、あゝん」

「あーん……ああ、梅干し超うめえ……胃に染み渡るぜ」

大の梅干し好きである天音は神流の手作りである梅干しを口に含み、幸せそうに頬を緩めた。

しかし、そんな彼の表情も同じ小隊に所属する仲間の一声で呆気なく霧散する。

「僕の目の前でそんなアホ面を披露しないでくれますか？不愉快で堪りませんので」

輸送機に乗って早20分、それまで全く口を開かなかった睦月が不快そうに眉を顰めながら言った。

「はいはい。そりゃ悪うござんした」

「ちつ……なんでこんな出来損ないが僕と同じ隊なのでしょうか。理解出来かねます」

「そんなに気に入らないなら転属願い出せば？」

「ちよつと、任務前に喧嘩なんてやめてよ！気持ちが悪くなるでしょ。天音も煽らないの！」

輸送機が剣呑な雰囲気支配されていく中で、その様子を遠目に眺めていた怜は苦笑しながら立ち上がった。

「はい、じゃれ合いはそこまで。今回の任務を説明するから端末を見るように」

怜の一声によって冷たい空気は霧散し、その場にいた全員が注目する。

その事に満足した怜は笑みを浮かべると、左腕に装着されているブレスレット状に加工された携帯端末を捜査し始めた。

「今回の任務は対馬駐屯地周辺で確認された”コイツ”の捕獲、若しくは排除になります」

その瞬間、他の隊員の携帯端末が相互リンクを始め、空中に立体画像を映し出した。

画像は縮小されているものの、データによれば体長5m弱はある類人猿タイプのUMである事がわかる。

データを参照していた神流が、ふと疑問を口にした。

「第二種乙型二級上類……ラドガモ。今まで乙三級の雑魚ばかりが対象だったのに、どうして突然？」

「どうしてって問われてもねえ。そろそろ小型だけじゃなくて中型のUMとの戦闘経験も積ませたいっていう私の配慮……って理由じ

やダメかしら？」

「僕としては願ったり叶ったりですが、どうしようもない足手纏いがある以上、恐らく苦戦は必至だと思いますよ？」

「……………」

睦月の台詞に怜の表情が若干曇る。

揶揄された当の天音は何も言わない。否、言えない。ただ、俯きながら拳を強く握りしめることしかできなかった。

そんな天音を神流は複雑そうな表情で見守った。

「睦月ちゃん、お願いだからそういうこと言わないで。皆でフオロしてあげましょう？ 私達はかけがえのない”仲間”なんだから」「そりゃ僕も最初はそう思って色々フオロしてきました。でも、前線に配属されるようになってもう半年も経つのにこれじゃあ、いくらなんでも——」

「………… 睦月ちゃん」

「………… わかりました」

怜の窘めるような、それでいて悲しそうな顔を見て、睦月は大人しく引き下がった。

しかし、心情的には納得していないらしい睦月は俯いている天音を睨みつける。

それが理由ではないのだろうか、天音はふと顔を上げると、弱々しく言った。

「隊長、俺、やっぱりここで待機していたほうが…………」

「それはダメ。天音ちゃんも一緒に来るの。これは仕事なんだから」「だけど…………」

だが、怜はそんな彼の甘えを許さない。

そこへ、痺れを切らしたように神流が怒声をあげた。

「ああもつ、さっきからウジウジとっ！男ならしゃんとしてよね。飯にも私達第4小隊のポイントマンでしょ？アンタがそんなんだとこっちは全力で支援できないのよ」

「神流……」

「私の知ってる天音は、こんなヘタレじゃなかったのに……」

「昔のことを引き合いに出すのは卑怯だろ！」

「あのね、私はこれでも——」

「2人ともいい加減にしなさい」

静かな怜の声に諭され、天音と神流は言い争いをやめる。あとには気まずい沈黙しか残らなかった。

『降下ポイント到着1分前です。アベンジャーの方々は降下準備をお願いします』

副操縦士からのアナウンスが機内に響き渡る。

怜は軽く溜息を吐くと、意識を切り替えるように表情を引き締めた。

「とにかく、留守番なんて許しません。作戦はいつものパターンAで。下に雑魚が群がっていた場合は、まずそちらを先に対処します。いい？」

「了解！」

「……りょーかい」

気合いの入った神流と睦月の返事に比べて、天音の声には全く覇気がなかった。

『降下ポイントに到着しました。御武運を』

副操縦士から最後のアナウンスが入ると同時に、甲高い電子音のあと、輸送機の後部ハッチが解放される。

「さあ皆、お仕事の時間よ」

隊長である怜の一声を皮切りに、第四小隊のアベンジャー達は遙か下に聳える大地へと飛び降りていった。

へりから大地まで100m程の落差がある。普通の生物なら即死する高さだ。しかし、その理にアベンジャーは含まれない。

軽く大地に罅を作りながらも華麗に着地した4人は、すぐさまフオーメーションを取りつつ周囲を観察した。

200年前に建てられたらしい家屋の名残が、荒廃した対馬の土地に途方もない寂寥感を滲ませる。とはいっても、4人は今の状態の対馬しか知らないので大した感慨はないのだが……。

「やはり、おこぼれに肖ろうと雑魚が群がってきてますね」

「予想どおりね。では、隊長権限により各自の武装開放を許可します。天音ちゃんはお猿さんの気を惹きつけといて。残りは散開の後、雑魚を陽動しつつ殲滅を開始するように。散って！」

その言葉を残し、怜は風のように駆けていった。それに続くようにして、神流と睦月もそれぞれの持ち場へ散っていく。

一人残された天音は本日何度目かもわからない深い溜息を吐くと、ポツリと呟いた。

「……………オープン」

その瞬間、左腕の携帯端末が輝きだし、眼前に薄緑色の光が収束していく。そして時間にして僅か0.5秒後、収束していた光が形を成して実体を作り上げた。

右手に収まるようにして現れたのは、外見は近未来的ながらも明らかに日本刀を模したと理解できる一振りの剣。世界最強のアベンジャーであり、両親がいない天音にとっては父親同然の人物がこよなく愛用している武器を真似て作らせた代物だ。

だが、今の自分に彼を真似る資格はない、そう心の中で呟いた天音は、邪念を振り払うようにして首を左右に振った。今は課された任務に集中するべきだと自分を戒める。

天音は携帯端末に映し出されるリアルタイムの索敵情報を読み取る。無数の反応の中で特に大きなACE反応を出している個体を識別すると、視覚にリンクする仕組みになっている方向マーカーを出現させ、その方角へ向けて走っていった。

進路上に雑魚の姿はない。

どうやら上手く陽動してくれたようだ。その事に安堵しつつ、天音は駆ける速度を上げていく。元は土地の大半を山林に覆われていたらしいが、今はそんなこともなく、ほとんど平地に開拓されているので脚力を存分に生かせた。一応、小さな属島に若干の緑が残ってはいるが、所詮はその程度でしかない。

200年前までは、この対馬は照葉樹が生い茂る緑豊かな美しい土地だったらしい。だが、朝鮮半島から渡ってきたUMの大群が対馬に上陸した際、どんなことをしてでもUMの本州上陸を避けたかった自衛軍は途方もない量の燃料気化爆弾を使用し、対馬の山峰ごと跡形もなく吹き飛ばしたのだそうだ。

ただ、そのおかげで対馬全域での陸上戦闘が容易になり、海を越えて来襲してくるUMを最高の環境で迎え撃つことができる貴重な最前線として利用できるようになったのだから、皮肉としか言いえない。

天音は緩慢な動きで周囲を徘徊しているラドガーマを視認すると、崩壊した家屋の壁に張り付き、息を整える。

ラドガーマは人間より遥かに優れた嗅覚で獲物の匂いを嗅ぎ取ったのか、鼻を空に向けてひくひくと動かし始めた。

天音は緊張から高鳴る鼓動を必死に抑え、震える手でウェストポーチから対UM用の特殊閃光手榴弾を取り出す。

それと同時に天音の位置を把握したらしいラドガーマが、巨体に見合わぬ俊敏さで跳躍し、30mほどあった距離を瞬く間に詰めてきた。地面を蹴った衝撃で砕け散った周囲の瓦礫が、その脚力の凄まじさを物語っている。

足は震え、加呼吸気味の胸は苦しい。鼓動は速いなんてものじゃなく、心臓が今にも爆発しそうだ。冷や汗は先ほどから流れっ放しで、吸汗性に優れたインナーを絞れば滝のように汗が溢れだすことだろう。

逃げ出したい——そんな切実な想いに駆られながらも、天音は瞳を強く瞑ってその衝動を耐え忍んだ。

そしてお互いの距離が10mを切った瞬間を見計らい、隠れていた壁から身を投げ出すようにして閃光手榴弾を投げつけた。

一瞬だけ小さな光が弾け、次の瞬間、ラドガーモは両目を押さえながら天に向って絶叫した。

膨大な声音が大地を震わせ、大気に轟いた。

人間の瞳にはほとんど無害という特殊な閃光弾だが、視覚を頼りにするUM相手には絶大な効果を齎す。

（なんとか目を潰すことには成功した……か）

網膜を焼かれて苦痛に悶えるラドガーモを見つめながら、天音は柄を握る両手に力を込める。手汗の量が尋常ではない。もしグローブをしていなければ、柄が掌から逃げるかもしれないほどだ。

（クソッ！なにビビッてんだよ天音！！昔のお前なら、この程度の雑魚瞬殺だっただろうが！！）

今なら致命傷を与えられる、確実に殺せる——そう確信できるのに、それでも身体は震えたまま動こうとしない。

そして、石像のように硬直したまま動けないでいるうちに、閃光弾の効果が切れた。

「しまっ——ッ!？」

壮絶な怒りで身を震わせるラドガーモは、上空に向かって思い切り跳躍すると、真下にいる天音に向けて全身の体重と渾身の腕力を乗せた拳を打ち下ろした。

まるで迫撃砲が着弾したような轟音と共に、背筋を凍らせるような衝撃が地面を叩き割る。

爆発的な勢いで舞った土煙が周囲一帯を容赦なく飲み込んだ。

突然の轟音に驚いた神流は反射的に音がした方向に振り向いた。視界の先では多量の土埃が宙へと舞い上がっている。

もしあれが標的であるUMの攻撃だとすれば、その破壊力は20世紀終わりの小型無誘導爆弾にも匹敵するだろう。直撃を喰らえばいくらアベンジャーでもただで済むまい。

「あの方向は……天音——ッ」

同じ小隊の仲間であり、同じ施設で育った幼馴染の危機を直感的に悟った神流は右手と左手それぞれに持った二丁の拳銃を強く握りしめた。

ただの拳銃ではなく、近接戦にも対応できるように銃身の下部には刃渡り40cmの剣が取り付けられている。

普通の人間では成人男子でも片手では持てないであろう重量のそ

れを軽々と扱ってみせる様は、まさしく彼女がアベンジャーである証だった。

「悪いけど、アンタ達と遊んでる暇はないの。さっさと土に還ってもらうわ」

彼女の殺気に反応して、ハイエナのように獲物に群がっていた乙三級の小型UM達が一齐に臨戦態勢に入った。

神流は自らの周囲に群がる有象無象の雑魚を忌々しげに睨みつけると、左右の腕を交差させるようにして二丁拳銃を構える。

四方を囲まれないように周囲に気を配りつつ、正面に展開するUMの群れに狙いを定めてトリガーを引いた。

銃口から猛り狂うように噴き出た、刹那の炎。そこから生み出されるのは相手を喰らい尽す必滅の牙。

雷鳴のように響き渡る轟音が鼓膜を貫く。

まるで機関銃を思わせる容赦のない猛連射——UM対策として調整された特殊な弾丸が獲物を次々と蹂躪していく。

飛び散る血飛沫、吹き飛ぶ脳髄。正面の敵を掃討した神流は交差させていた両腕を左右に広げて伸ばし、再びトリガーを引く。

獣、爬虫類、昆虫、e t c……様々なタイプのUMが跳梁跋扈するこの空間の中で、神流は唯一弱点と判断できる頭部を的確に——それこそ、ただの一発も外すことなく撃ち抜いていった。

そして、最後の銃声が空へと轟き、辺りに静寂が訪れる。一丁の拳銃につき装弾数は22発。二丁で44発の弾丸を撃ち尽くす頃には周囲のUMは一掃されていた。最初にトリガーを引いてから10

秒も経っていない。恐るべき速さだった。

神流は静かになった周囲一帯を注意深く観察し、尚且つ携帯端末の索敵モードで自分がいるエリアには一匹のUMも存在しないことを確認すると、軽く息を吐いた。

そのまま携帯端末を索敵モードから通信モードに切り替え、隊長である怜を呼び出す。

「隊長、私が担当するエリアの掃討は完了しました。これより天音の援護に向かいます」

『了解。こっちはUMが広く分散しちゃってるみたいで、掃討にはもう少し時間がかかりそうなの。私が駆けつけるまで天音ちゃんをお願いね。ああ勿論、二人で倒せそうなら倒しちゃっても構わないから』

「わかりました」

通信を終え、先程轟音がした方向をじつと見つめる。

ここから土煙があがっている場所まで距離は凡そ1km。30秒もあれば辿り着ける距離だ。

「世話が焼けるんだから……」

そうばやきながら、十中八九苦戦しているであろう頼りない仲間の元へ向かう。

神流は廃墟となった街中を風のように駆け抜けながら、天音が怪我を負っていないことを祈った。

第一世代型は文字通り一騎当千当万の戦闘力を持つ最強の兵器（兵士ではない）というコンセプトで作られた。適合条件が非常に厳しく、尚且つ適合者の術後生存率が絶望的なまでに低い。適合者が無事にアベンジャーになれる確率は約一〇〇〇〇〇〇分の一以下。アベンジャーの中で唯一不老の特性を有し、そのせいか生殖能力も失われた。髪の毛が白く変色、体内のA c Eが活性化すると瞳孔が紅くなってしまう特徴を持つ。

第二世代型は第一世代型に比べて戦闘能力が低下する代わりに、あまりに酷過ぎた適合者の術後生存確率を改善するというコンセプトで作られた。新エネルギーの研究開発も第一世代型製造時とは一線を画すほどの発展を遂げ、戦争終結時には激減していたアベンジャーの人員をそれなりに補充することに成功する。第一世代型に比べてその戦闘能力は四分の一以下になったとはいえ、それでも第一世代に次ぐ戦闘力を有している。この代では髪の毛が白く変色し、体内のA c Eが活性化すると瞳孔が紅くなってしまう特徴を改善できなかった。第一世代とは違い不老の特性は存在しない為、生殖能力は失われていない。

第二・五世代型は第二世代型アベンジャーの男女を性行為させ、その子供にアベンジャーとしての両親の能力を受け継がせるという目的で研究された。事実、赤子は生まれた当時からA c Eを体内で循環させる方法をDNAレベルで刻まれたらしく、A c Eに対して非常に高い適合性を示した。しかし、その子供は例外なく5歳に達する前に死亡してしまう為、研究開発はやむなく中断。歴史の闇に

葬られることになる。

第三世代型は第一、第二世代型が一对多数の戦闘を想定して作られていたことに対し、多数対一、つまり相互連携戦闘を前提にして作られた。それまで新エネルギーという概念で捉えられていたACEも最早日常生活になくてはならないほど世界に浸透し、研究開発も一旦の終局を迎えて久しい時代であり、第二世代型よりもさらに戦闘能力が30%ほど低下したが、その分適合者の術後生存率を50%以上にまで向上させることに成功、史上最も多くのアベンジャーを輩出した。ただし、一個体の著しい戦闘能力低下が原因で、同じく史上最も多くの殉職者を出した。髪の毛と瞳孔の変色が改善されたのはこの世代である。

第四世代型は第三世代型の著しい戦闘能力低下の反省を踏まえ、多数対一というコンセプトは変わらないまま、第二世代型の能力を基準とし、戦闘能力特化型と生存能力特化型の二種類に分類することで、術後生存率のさらなる向上を目指しつつ、個体の能力向上を限定的にだが第二世代型に匹敵させようとする目的で生み出された。数は少ないものの、平均的な第二世代型の能力を上回る数値がそれぞれ戦闘型と生存型の双方で確認されている。

乙型とはUMのランクを示す言葉で、所謂下級ランク。最下位の三級から最上位の一級までレベルが設定されており、さらに細かく上、中、下類と分類されている。その中で小型(0~3m未満)の三種、中型(3~6m未満)の二種、大型(6~10m未満)の一種、超大型(10m以上)の特一種と個体の大きさが設定されている。主に朝鮮半島から日本列島に侵入してくるケースが高く、下級部隊は基本的に対馬駐屯地を最前線基地として送り出される場合が多い。

甲型とは乙型と同じくUMのランクを示す言葉で、所謂上級ランク。樺太を通じて北海道に上陸してくるケースが高く、上級部隊は主に千歳基地を通じて最前線の南樺太に送り出される。あとの設定は乙型と同じだが、甲型に限り一級のさらに上である特一級が存在する。

特殊型とは基本的に群れない乙二級以上のUMを一手に束ね、統率する力を持つ特別なUMの事である。もし発見した場合は現状の任務を途中放棄してでも狩らねばならない最優先殲滅対象。しかし、特殊型に指定されているUMはその大半が甲型一級から特一級に匹敵する戦闘力を有しており、一人の例外を除いては最低でも上級部隊5つ以上の合同戦力で臨まなければならない。

アベンジャー専用の近接武器には、基本的に高周波による超振動を発生させるシステムが採用されており、地球上のほぼ全ての物質を切断することが可能となっている。あとは各々でデザインやらの何やらの細かな設定が異なっているのみ。

アベンジャーが使用する銃器はどれも特注の代物である。当然の如く、弾薬を消費して標的を殺傷するものだが、軍で使用されている物のように弾倉の交換をいちいち手で行う必要がない。

弾倉に装填されている弾丸の残弾数が0になると、銃本体に内蔵されているAIチップが自動で空弾倉を排出し、即座に新しい弾倉をダウンロード、直接装填する仕組みになっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1641n/>

アベンジャー

2010年10月12日14時52分発行